

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2891900033		
法人名	社会福祉法人 栄宏福祉会		
事業所名	グループホーム こもれび		
所在地	〒675-1362兵庫県小野市久保木町字出晴1561-24		
自己評価作成日	H23年3月28日	評価結果市町村受理日	平成23年5月18日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2891900033&SCD=320
----------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 姫路市介護サービス第三者評価機構
所在地	姫路市安田三丁目1番地 姫路市自治福祉会館6階
訪問調査日	平成23年4月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域の一員として、さまざまな地域活動に積極的に参加し、利用者と地域の人々との交流をより深めていきたい。そして、利用者が地域で暮らしていることを肌で感じられるような取り組みを工夫し、「住みなれた地域で共に楽しく生きる」という理念が日々の暮らしの中で実践できるようにしたい。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

小野市郊外に建設された1ユニットのグループホームで、地域密着型特別養護老人ホーム、デイサービス、ヘルパーステーションも併設されている。ゆったりした敷地内には広い畑や公園、散歩道も整備されており充分な運動も可能である。畑では利用者自身が作った四季折々の野菜を収穫し新鮮な食材としてテーブルに並び、また竹林もあり旬の筍も収穫出来る。ホームの一部は喫茶室があり、地元の方が出入りし易いように配慮している。飲み物とお菓子が付いて150円で提供している。施設は地元との繋がりも強く、要請により介護教室や認知症の理解をする研修会の講師として管理者や職員は活動している。施設は高台に位置している都合から地域の方からは避難所として利用したいとの要請も受けており承諾している。法人としては4つの施設を地域貢献の一部と考えており地元との係わりを大切にしている。

サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Alt+Enter)です。]

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくっている。管理者と職員は、その理念を共有し、意識づけしていくために、毎朝の朝礼事や勉強会で理念の共有化を図っている。また、日々話し合っていて、いかに実践で繋げていけるか等をみんなで考えている。	法人の理念として「住み慣れた地域で共に楽しく生きる 感謝の心を持ち、正直に職務を遂行する」を掲げておりグループホームも同様の趣旨で運営を行なっている。地域に根ざしたホームとして管理者と職員一同は理念を共有している。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域社会と繋がりながら、利用者が当たり前の暮らしを続けられるように、事業所事体が地域から孤立することがないように、自治会への入会、近所付き合い、地元の活動、地域住民との交流に積極的に取り組んでいる。	自治会への入会は基より、老人会や婦人部とも日常的に交流をしている。地域からの依頼により介護教室や認知症理解の講習会を開き、講師として参加し、地域との日常的な交流を行なっている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所の実践経験を活かし、「出前講座」をしている。公民館、コミュニティーセンター等で、「介護教室」を地域の皆様の要望によりおこなっている。また、当事業所内で地域の人と利用者の交流として、「書道教室」、「絵画教室」も毎月開催している。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	報告や情報交換にとどまらず、会議メンバーから率直な意見をもらい、それをサービスの向上に活かしている。	行政にも参加を依頼して年に2回は実施するようにしている。今年は3月22日に開催しており、活動報告を行なっている。	ホームとしては行政にも参加してもらい、年に2回は開催しているが、基準省令第85条では概ね2ヵ月に1回開催することが明示されており今後の課題として頂きたい。
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎月 数回、市町村担当者に事業所の考え、現場実情等を伝える機会を作り、直面している課題解決に向けた話し合いをしている。市町村担当者と協働関係は築けている。	成年後見人制度の利用についての相談や、利用者の住んでいる土地問題等の相談も受けており、日頃から市との協力関係を築いている。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月、身体拘束についての会議や勉強会をおこなっており、全ての職員が身体拘束の内容と、その弊害を認識し、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。安全を確保しつつ、その人らしい暮らしを支援するための工夫にも取り組んでいる。	ホーム内の研修で身体拘束に関する研修を行っており職員の理解を促しながらケアに取り組んでいる。ヒヤリハットの事例を基に職員同士でロールプレーを行い色々な状況を研修している。	なぜ身体拘束をしないケアが必要なのか、その目的と理由を明確にすることが求められています。職員間での考え方に差が無いように研修を行なうことが望まれる。
7	(6)	虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内勉強会で高齢者虐待防止について学んでいる。事業所内での虐待が見過ごされることのないよう注意を払っている。	月2回行なわれているホーム内の研修で虐待に関する研修を行っており職員は十分に理解し、注意をはらいながらケアに取り組んでいる。	今後の職員のステップアップの一環として、不適切ケアやストレスマネジメントを含めた研修を行い、ケアの質向上と職員のストレスが残らないような工夫も必要である。

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者と職員は、成年後見制度について学び、必要とされる利用者が、それらを活用できるように話し合い、現状、1名の利用者が制度を利用されている。	利用者の財産問題が深刻化し成年後見制度に繋いだ経緯がある。成年後見人が就いた事で財産を守ることができた前例がある。	
9	(8)	契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者やご家族等が不安や疑問等を十分に表せるような働きかけと、説明を行い、納得を得た上で手続きを進めていく個別の配慮や取り組みをしている。	家族と利用者への説明は主に相談員が充分に行なっており、管理者も補足説明等を行い十分に理解をしてもらえるようにしている。	
10	(9)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者やご家族からの意見、要望を引き出すため、意見箱の設置、ボランティアの導入を行っている。運営推進会議のメンバーや外部の人にも伝えられる機会を作り、出された率直な意見などを前向きに活かす体制をとり、サービスの質の向上に努めている。	家族会では要望や意見は出にくいためにお茶会や年末大掃除の時に家族にも来てもらいざっくばらんに話を聞く機会を持っている。利用者にかんしては、日頃接しているボランティアを通じて要望等の把握が出来るようにしている。	
11	(10)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の率直な意見を聴くため、職員専用の意見箱を設置している。また、職員の意見や提案を聞く機会として、月に1度連携会議や運営会議をおこなっている。職員の声に耳を傾け、活かし、働く意欲の向上に繋がっていくよう努めている。	月に1回開催される運営会議や連携会議の機会を通じて職員と意見交換を行なっている。新しく作った公園を利用してフリーマーケットを行なう要望もあり、開催する方向で検討を行なっている。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	運営者は、職員の日頃の努力や具体的な実績、勤務状況等を把握し、職員処遇への反映や、向上心を持って働けるような配慮に努めている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は職員育成の重要性を認識している。全ての職員の質を向上させていけるよう、法人内外の研修を受ける機会の確保や働きながら学ぶことを進めている。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内の3か所のグループホーム事業所が2カ月毎に輪番制で連絡会を開催している。連絡会では、他ホームの見学会や勉強会等の活動を通じて職員の育成、介護計画の作成、家族会の運営等について話し合い、意見、助言等をサービスの質の向上に活かしている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の安心を確保していく上で、関係づくりが重要であることを職員は認識しており、本人の気持ちを受け止めたり、本人の声に耳を傾けたりしながら、信頼関係の構築に努めている。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族等の話をしっかりと聴き、家族の体験や思いを理解しながら、その家族自身を受け止め、関係性を築くように努めている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時の本人、ご家族等の事情や要望をもとに、その時点で何が必要かを見極め事業所として、出来る限りの対応に努めている。また、事業所だけで抱え込まず、必要に応じて、他のサービス利用も含めた対応に努めている。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人と時間をかけて関わっていく中で、より深く本人を知ることができ、職員と本人は、一方的な縦の関係を脱することができる。共に過ごすことにより、利用者に安心感と安定感を持って頂けるように努めている。		
19		本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は本人とご家族の支援者であり、これまでの両者の関係を踏まえつつ、今後より良い関係を築いていけるための支援に努めている。		
20	(11)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知人、友人、商店街、行きつけの場所等との付き合いを本人が続けられるように、実際に外出したり、来てもらったりして馴染みの人や場所との関係が途切れないよう支援に努めている。	老人会や婦人部の方々気軽に訪問してくれておりざっくばらんに昔話をしている利用者も多い。利用者は近隣の地元から来ている方も多く、話はずんでい。利用者の希望に応じて行きつけの場所に行けるように支援している。	
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者間の関係の理解に努め、利用者が孤立せず、共に暮らしを楽しめるような支援に努めている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22			関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	転居が必要となった場合でも、転居先の関係者に対して、本人の状況、習慣、好み、これまでのケアの工夫等の情報を詳しく伝え、関係を断ち切らない支援に努めている。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(12)		思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者がその人らしく暮らし続ける支援に向けて、利用者一人ひとりの思いや、意向等の把握に努めている、また、把握が困難な場合は、関係者が本人の視点にたつて意見を出し合い、話しあっている。	日頃の会話の中から利用者の思いや意向を把握出来るようにしている。訪問しているボランティアから利用者の思いを聞いてもらい意向の把握を行なったこともある。	利用者との会話の中から意向の把握をしており個別ケアが行なわれるきっかけ作りをしている。今後は一歩進んでセンター方式を利用し情報を共有しながら利用者の気持ちに寄り添うケアの確立について検討して頂きたい。
24			これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者が自分らしく暮らしていくことを支援するために、プライバシーに配慮しつつ、職員が本人やご家族と馴染みの関係を築きながら、生活歴や生活環境の把握に努めている。		
25			暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	特に見落とされやすい、本人の「できる力」、「わかる力」を日々の暮らしの中で全職員が把握できるよう努めている。		
26	(13)		チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	関係者が気づきや意見を出し合い、話し合った結果をもとに、介護計画を作成している。本人やご家族等からの新たな要望や状況の変化がないようでも毎月1回モニタリングしている。	ホーム独自のアセスメントシートを作成し利用している。モニタリングは月に1回必ず行ない介護計画に反映できるように職員間で共有している。	
27			個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人を身近で支える職員しか知り得ない事実や、ケアの気づき等を個別に記録し、その記録を根拠にしながら、介護計画の見直しに活かしている。		
28			一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者のニーズに対して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に努めている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29	地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう、地域のボランティア、町の商店、スーパーマーケット、理美容院、病院等を把握し、これらの地域の人や場の力を借りた取り組みをしている。		
30	(14) かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人が馴染みの医師による継続的な医療を受けられるよう、また、本人や家族が希望する医師による医療を受けられるように支援している。	利用者のかかりつけ医は把握しており受診する場合は家族が同伴して通院する。家族が行けない場合はホームの車で通院をしている。毎週木曜日には医療機関の医師の往診が受けられる。	
31	看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	普段の健康管理や観察の視点など、日頃から介護職と看護職との連携を密にし、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。		
32	(15) 入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際、安心して治療ができ、スムーズに退院できるように、病院関係者、本人、ご家族と退院計画を話し合いながら、積極的に支援をしている。また、病院主催の地域連絡会には必ず参加し、病院関係者との関係づくりに努めている。	病院主催の地域連絡会には必ず参加しており日頃から病院との関係作りを行なっている。退院前には必ず病院関係者とカンファレンスを行い退院に向けた計画を行なっている。	
33	(16) 重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期支援のあり方や事業所の対応について、段階ごとに家族等、かかりつけ医等のケア関係者と意向を確認しながら、対応方針の共有を図っている。	ホームの利用時に重度化や終末期に於ける対応について話し合っている。ターミナルの受け入れも可能で、看取りに関する指針を作成し家族の同意を得るようにしている。	
34	急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の身体状態の急変や、事故発生時に備えて、確実かつ適切な行動がとれるように全ての職員が応急手当に関して、訓練を行っているが、全ての職員が実践力を身につけているわけではない。		
35	(17) 災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時の避難訓練は併設の事業所と協力し、一緒に行っている。災害時に備えて、食糧や飲料水等の物品など準備している。	夜間を想定した火災訓練や、職員には告げずに抜き打ちで火災訓練を行なっている。地域の方の協力についても日頃からお願いしており、高台にあるホームを地域の避難所とするように地元から依頼を受けている。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(18)		一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の尊厳と権利を守ることは、介護の基本であるということを勉強会等で全職員が確認できる機会を作っており、常に誇りやプライバシーを損ねない言葉かけの重要性を話しあっているが、実際には難しい。	管理者は高齢者介護のキーワードは「尊厳の保持」であるとの認識をもち事業所運営の土台に位置づけている。その視点を堅持しながら月2回の研修会で具体的に積み重ねるようにしているが、ケアの実践に繋がっているかは道半ばである。	認知症ケアに従事する者は人格を尊重すること、プライバシーを損ねないこと等の内容について正しく理解することが求められます。そのため権利擁護に関する法制度等についても理解し、ケアと結びつける取り組みを期待したい。
37			利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が言葉では十分に意思表示ができない場合であっても、日々の密接な関係者や馴染みの中で、表情や全身の反応を注意深く観察し、自己決定できるように働きかけている。		
38			日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その人らしい暮らしを支援するため、主人公である本人を見守りながら、その動きや状態に合わせた適切な関わり方をし、一日の過ごし方について、柔軟に対応している。		
39			身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、服装等の身だしなみやおしゃれを個別に支援している。		
40	(19)		食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者のADLの低下にともない、職員と一緒に準備や片付けをする機会は少なくなっているが、調理の日を決めて、調理を楽しんでもらえるように工夫している。一人ひとりの好みや持っている力を活かした支援をしている。	食材の一部は利用者が畑で作った野菜を収穫し食している。手伝いが出来る利用者は職員と一緒におかずを作ったり味付けをしている。出来るだけ五感を感じてもらえるように、おかずのネーミングを考えている。春の天ぷらやふわっとプリンとか。	
41			栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	普段から利用者の食べ物や飲み物の好みや習慣、様子を把握しながら、体調や運動量、体重の増減、介助方法等、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。		
42			口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	月に2回 歯科衛生士に来てもらい、指導を受け、口腔内の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)		排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	最初からあきらめないで、トイレでの排泄を前向きに支援している。。オムツの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄パターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援をおこなっている。	管理者と職員は、おむつを使用することは最終段階だと考えている。利用者の好みによりオリゴ糖を飲んで排便を容易にする工夫も行い、出来るだけ自然な形で排泄が出来るようにしている。	
44			便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	まずは、個々の便秘の原因を探り、本人、ご家族と相談しながら、一人ひとりに応じた自然排便を促すため、オリゴ糖の使用、散歩、運動、リハビリ、ラジオ体操等の工夫をしている。		
45	(21)		入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人ひとりの希望やタイミングに合わせ、利用者に無理強いすることなく、一人ひとりの意向を第一に、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	1人ひとりがゆっくり入浴出来るように週に2回以上は楽しめるようにしている。利用者の要望があればいつでも入浴が出来る。入浴を嫌がる利用者にも清拭はなるべく行わずに入浴してもらえるように声掛けをしている。	
46			安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人にとっての自然なリズムを大切に、本人の生活習慣や本人の活動状況、ストレスの状態を把握し、安心して気持ちよく、休憩したり、よく眠れるように努めている。		
47			服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりが服用する薬の目的や副作用、用量について理解し、飲み忘れや誤薬を防ぐための取り組みに努めている。また、本人の状態の経過や変化等に関する日常の記録を、医療関係者に情報提供している。		
48			役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	潜在している記憶や、できる力を最大限活かして自分らしく暮らせるように、一人ひとりに合った役割や楽しみ、気分転換等を支援している。		
49	(22)		日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その人らしい暮らしを保ち、本人の意欲や自立を保つためにも、本人の思いに添って、行きたい場所への外出支援を行うように努めている。	広々とした庭で、朝は体操を行ったりホーム周辺を散歩道としていつでも外出は出来るように配慮している。定期的買い物に行ったり、季節によっては花見や初詣にも出かけている。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50			お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人ひとりの希望や力に応じて、ちょっとした買い物をするなど、お金を使うことを楽しんでもらえる支援に努めている。事業所にて、利用者の金銭を預かっているが、使途に関する相談、報告など預かり金に関する取り扱い方法については、ご家族と相談し合意を得ている。		
51			電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	プライバシーに配慮しながら、一人ひとりの手紙、電話の習慣や希望、有する力に応じて、外部との交流を支援している。		
52	(23)		居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者一人ひとりの感覚や価値観を大切にしながら、利用者にとって居心地のよい場所づくりに努めている。また、生活感や季節感も大事にしている。	リビングには大きな座り心地良い椅子が置いてあり、リラックス出来る。温度、湿度も適切に管理されており快適に過ごすことが出来る。	
53			共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	人の気配が感じられる空間の中で、一人になれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。		
54	(24)		居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	プライバシーを大切にしながら、居心地よく、安心して過ごせる環境作りに努めているが、使い慣れた物や好みのものを活かす工夫が、今後、もっと必要である。	ベッドと衣類用の箆笥は部屋に据付られているものを利用しているが、利用者の使い慣れた好みのものの持ち込みは自由であり、利用者、家族には持込することを推奨している。	
55			一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ひとりの身体機能の状態に合わせた危険の防止や、自分の力を活かして動けることを支えるための、個別の設備、道具を工夫している。		